

H・アーレントの近代社会批判の論理
——「社会的なもの」と「私的なもの」との関係性に着目して——
小森（井上）達郎（立命館大学客員研究員）

アーレントは、近代社会において、「世界」の持続的存立を保証する根本的条件として重視した「公的領域」と「私的領域」の並立状況の間に、「社会的なもの（the social）」という「第三の領域」が勃興してきた経緯を批判的に論述している。彼女の「社会的なもの」という概念は、これまでの研究でもその内実とは、「(資本主義的)市場経済」や、それを管理・規制する「行政国家（「国民国家」）、または国王の宮廷や上流階級のサロンといった「社交的空間」、さらには「大衆社会」的状況など、政治・経済・社会文化的な側面を含意する多義的な意味を併せ持つ概念として解釈されており、難解とされる彼女の諸概念のなかでも、とりわけ整合的な解釈が困難な概念だと見なされてきた（Canovan 1992=2004; Benhabib 1996; Pitkin 1995=2001; Fry 2009; Owens 2011 川崎 2010; Walsh 2014, 2016 など）。

また、「政治的なもの」と「社会的なもの」との峻別というアーレントの有名な主張については、そこに「社会的不正」に対する彼女の関心の欠如を見出し、両者を区別することで、アーレントは貧困問題を主題とする「社会問題」を政治的には解決不可能な問題だと見なし、政治が取り組むべき問題対象から除外したと批判されてきた（Jay 1978=1989; Pitkin 1981, 1998; Bernstein 1986; D'Entrèves 1994 など）。さらに、「政治的なもの」と「私的なもの」とを媒介する「中間領域」として「社会的なもの」の意義を積極的に捉え直そうとする近年の国内の研究動向でも、「社会的なもの」に対するアーレントの理解の狭隘さについて度々批判的に言及されてきた（市野川 2006, 2010; 市野川・宇城編 2013; 宇野 2016; 稲葉 2017 など）。

このように、解釈者たちを悩ませるとともに多くの批判にさらされてきた「社会的なもの」という概念を用いて構成された近代社会批判において、アーレントが提起しようとした問題とは何だったのか。本発表では、必ずしも十分に論じられてこなかった「社会的なもの」と「私的なもの」との関係性に着目して、アーレントの近代社会批判の論理の一端を考察する。彼女は、近代社会では「社会的なもの」が「政治的なもの」と衝突するのみならず、「私的なもの」とも鋭く対立することについて自覚的である（cf. HC: 38=60）。『人間の条件』を中心とするアーレントのいくつかの著作・論考を参照しつつ、「政治的なもの」と「私的なもの」との関係性を変容させ遮断してしまう「社会的なもの」に対する彼女の批判の論理を解明するとともに、従来の研究では看過されがちだったアーレントの「私的領域」論には、「政治的なもの」と「私的なもの」との間に存在する固有の関係性について注目すべき洞察が見出せるということを目指したい。